

2021年5月17日



一般社団法人応用脳科学コンソーシアム

CANが新しいテーマでの研究を開始！参画企業も8社へ

このたび、「一般社団法人応用脳科学コンソーシアム（Consortium for Applied Neuroscience、以下CAN）」（代表理事・会長：柳田 敏雄、代表理事・理事長：岩本敏男、所在地：東京都千代田区）は、新たに、高砂香料工業株式会社（代表取締役社長：榊村 聡）、株式会社竹中工務店（代表取締役社長：佐々木 正人）、株式会社三井住友フィナンシャルグループ（執行役社長 CEO：太田 純）の参加を得て、旭化成株式会社（代表取締役社長：小堀 秀毅）、アサヒクオリティードイノベーションズ株式会社（代表取締役社長：佐見 学）、株式会社NTT データ（代表取締役社長：本間 洋）、株式会社NTT データ経営研究所（代表取締役社長：柳 圭一郎）、DIC 株式会社（代表取締役 社長執行役員：猪野 薫）、の異業種企業計8社は、国立研究開発法人情報通信研究機構（NICT）脳情報通信融合研究センター（CiNet）（理事長：徳田 英幸）などの研究機関や大学などと連携し、人間が五感を通じて統合的に感じる価値を感性価値として、脳情報をベースに評価・探索・予測する AI の研究開発を本格的に開始しましたので、お知らせいたします。まずは、①視覚と嗅覚のクロスモーダル価値、②視覚と触覚のクロスモーダル価値、③空間感性価値、④コミュニケーションにおける感性価値、などに関して脳科学と AI の融合研究による AI の開発を行なってまいります。

CAN では今後、設立の趣旨に同意いただき参加して下さる企業を様々な異なる分野から広く募集し、さらなる研究開発の道のりを模索していく予定です。

研究開発の背景

人間は多くの場合、視覚を中心に聴覚、さらに触覚、嗅覚、味覚など五感を通じて人間の外からの様々な環境変化の情報を脳に入力し、その変化に対応するために脳がその情報を認知し、様々な選択肢の中から意思決定を行ない行動に移します。

日常生活において脳に入力される情報は、時間の経過や環境によって異なることがわかっています。そして、同じ入力情報でも、個人の知覚センサー特性、本能的・経験的・学習的な脳特性によってその処理が異なり、異なる意思決定、異なる行動を引き起こすことがあります。

一方、現在、企業は、大きな流れとなりつつある市場の細分化やマスパーソナライゼーション化の流れに効率的に対応できる事業体制の構築が必要になっています。

このような背景のもと、CAN では脳情報を活用し、脳特性をモデル化することによって、様々な感性価値の評価、探索、予測に資する AI の研究開発に取り組んでいます。

【参考】

CAN 設立の背景

世界中で AI の研究や事業応用が急速に進む中、今後、DX（デジタルトランスフォーメーション）の流れにのり、AI がビジネスに与えるインパクトはさらに大きくなると予想されています。このような中、人間の脳の仕組みや機能を AI に応用する脳科学と AI の融合研究は、今後、一つの大きな分野となりうる可能性を秘めています。

日本の脳科学研究は世界でもトップレベルであり、若手の優秀な研究者が多数存在しますが、そういった脳科学の研究者の持つ知見や研究成果をビジネスへ応用することを推進する場は不足しているのが現状です。

この度、一般社団法人応用脳科学コンソーシアムを発足することで、脳科学研究と AI 開発を融合し、その成果の産業応用を通じ、わが国の国際的競争力強化の一助となるよう、努めてまいります。

CAN 設立の目的

- このような背景のもと、日本国内において中長期的かつ継続的に脳科学と AI の融合研究の産業応用に向けた取り組みを実施する、社会的中立性の高い組織の実現を目指す。
- 脳科学研究と AI の融合を図り、その成果の産業応用を加速し、日本企業の国際競争力を強化できる仕組みの構築を目指す。
- 複数の企業と研究機関が協力して共同で研究開発を行なうことで、不足しがちな人的資源、情報資源などを効率的に配分し、研究開発を加速するとともに、脳科学と AI の融合に関する知見を産業に応用できる人材の育成を図る。

CAN の活動概要

- CAN 内に、新たに脳モデル開発ユニットを設置する。同ユニットでは、五感入力（刺激情報）を中心とした身体内外の環境変化に対する脳反応を脳情報データベースとして蓄積・解析を行ない、脳モデルの構築を目指す。さらにそのモデルをベースとした AI の研究開発に取り組む。
- 応用脳科学 R&D 研究会による研究活動、応用脳科学アカデミーによる脳科学や AI に関する学習機会の提供、応用脳科学ネットワークによる脳科学や AI を含め人間研究に関する情報をメールマガジンや SNS で提供するなど、脳科学の産業応用に関する普及啓発、脳科学と AI の知見を有する人材の育成を行なう。

脳モデル開発ユニット参加企業（50音順、2021年5月1日現在）：

- 旭化成株式会社
- アサヒクオリティードイノベーションズ株式会社
- 株式会社 NTT データ
- 株式会社 NTT データ経営研究所
- 高砂香料工業株式会社（新規参加）
- 株式会社竹中工務店（新規参加）
- DIC 株式会社
- 株式会社三井住友フィナンシャルグループ（新規参加）

異業種の民間企業と異分野の研究者が一堂に会し、脳科学、心理学、人工知能等の最新の研究知見を基盤に「研究開発」、「人材育成」、「人材交流及び社会啓発」に取り組むオープンイノベーションモデルのコンソーシアムであり、右記に示す2つのユニット、3つのプラットフォーム(①～③)で構成

脳モデル開発ユニット

一定の年会費会員資格を有し、かつ研究開発資金を拠出した会員企業で構成され、共同で脳科学研究と人工知能研究を融合した脳融合型AIの本格的な産学連携型研究開発を行うユニット。

応用脳科学活動ユニット

① 応用脳科学R&D研究会

特定の研究テーマについて、研究者と複数の会員企業が参画し、脳科学、心理学、人工知能等の最新の研究知見を活用した応用脳科学研究をトライアル実施する研究開発のプラットフォーム。

② 応用脳科学アカデミー

応用脳科学研究及びその事業活用に貢献する人材育成のプラットフォーム。第一線で活躍されている脳科学、心理学、人工知能、行動経済学等の研究者を講師として招聘し、様々な観点から人間と脳について学ぶ。

③ 応用脳科学ネットワーク

会員企業と研究者の交流、人材育成に資する応用脳科学研究に関連する情報収集、メルマガ、レポート等での情報提供、本コンソーシアムの活動の社会への発信を促進する情報発信活動を行うプラットフォーム。

本件に関するお問合せ先：

一般社団法人応用脳科学コンソーシアム 事務局：萩原、岡

E-mail: can@can-neuro.org